



けんこう 処方箋

北海道対がん協会長 加藤 元嗣



がん検診控え コロナ禍の影

ここ数年の新型コロナの感染拡大が、がん検診の受診率低下を引き起こしていることをご存じでしょうか。受診率が下がれば、治癒可能な早期がんの発見機会が失われるわけで、今後、がん死亡率の上昇を招くことを心配しています。

日本で新型コロナ感染者が初めて報告されたのは2020年1月のこと。瞬く間に感染が広がり、3月には東京オリンピックの開催延期が決定。4月には政府の緊急事態宣言が発出され、三密を避ける新しい生活様式が日常化しました。この間、首相官邸や厚生労働省の呼びかけで、自治体などの検診実施者が検診延期や中止を決めました。受診者側でも感染を恐れた受診控えが起きました。さらに、検診を実施する医療機関などが三密回避で受診者数を絞ったことで、がん検診だけでなく、住民健診や職域健診も含め、受診率は大きく落ち込みました。

日本対がん協会の全国42支部によると、がん検診受診者数は、コロナ禍前と比べ、2020年度で五つのがん検診全体で18.1%の減少で、発見がん数は23%低下しました。がん死亡率上昇への危機感を募らせた協会では「がん検診の受診は不要・不急の外出には当たらない」と呼びかけました。しかし、21年度はやや回復したものの、全体で10.2%の減少でコロナ禍前の状態へ回復するには至りませんでした。

住民検診の事業報告でも、20年度のがん検診受診者数は前年比15%減で、検診による発見がん数は16%減少しました。医療機関の受診で発見されたがんも含めた全国がん登録でみると、胃・大腸・肺・乳・子宮頸がんの発見数は、20年度では前年比7.2%減でした。

これは、がん患者が減ったわけではな

イラスト・佐藤博美

く、本来なら検診などで発見されたはずのがんが、コロナ禍の影響で見逃され、潜在化してしまったことを意味します。21年度以降は、がん発見数は回復傾向ですが、20年度にがんを見逃された患者の増加分は、統計上まだ浮かんできていません。数年後、進行した状態でがんが見つかり始め、がん死亡率が上昇するのではないかと懸念しています。

実際、横浜市の複数の病院で、コロナ禍前後のがん発見数と発見時の病期（ステージ）を調べた研究があります。胃がんと大腸がんで、20年に早期ステージで発見されたがんが有意に減少し、21年には早期ステージが増える一方で、ステージⅢの進行がんも増えています。

もともと北海道のがん検診受診率は全国でもワースト状態。コロナ禍でがん検診の受診を控えた方はなるべく早く受診を再開することをお勧めします。